

意見述べにおける抽象性 —その表れ方と教育への指針—

荻原 稚佳子
明海大学

齊藤 眞理子
文化女子大学

要旨

外国語教育においては、口頭運用能力が上がるに従い、専門的・社会的な話題について高度な語彙や多様な表現を使って、複雑なことでも詳細に話すことができると考えられている。だが、そのような話題では抽象度が増すことから、聞き手を納得させるような内容で話すためには、抽象的に述べるが必要になってくる。

そこで、本研究では、調査1として、まず、抽象性について心像性と具象性という観点から考察した上で、具象から抽象への三つの段階を設定した。次に、調査2として、社会的な話題について意見を述べている日本語母語話者と中国語・韓国語話者の超級話者・上級話者の談話を詳細に分析し、最も抽象度の高い「概念レベル」の意見述べで使用される語彙・表現、その使われ方、出現頻度について調査した。その結果を踏まえ、日本語学習者が抽象的に意見を述べられるようになるための教育の指針を3点提案した。

【キーワード】 抽象性、具象性、意見述べ、超級、概念レベル

1. はじめに

外国語教育においては口頭運用能力が上がるに従って「難しい話ができる」ようになると言われる。一般的に、「難しい話ができる」とは、日常的な話題だけではなく、専門的・社会的な話題についても話せることであると考えられる。ACTFL-OPI 基準によれば、超級レベルでは専門的・社会的な話題についての意見述べができるとされている(日本語 OPI 研究会翻訳プロジェクトチーム 1999)。

社会的な話題について意見を述べる際には、高度な語彙や多様な表現が必要となる。そして、意見を効率的に述べるには具体的な事実について言及するだけでなく、抽象的なレベルで概念をまとめてゆくことが不可欠となる(高野 1984)。

けれども、これまで抽象的に話すとはどういうことかについては、あまり研究されてこなかった。そこで、本研究では、抽象的に話すとはどういう事なのかについて考え、抽象的に話すために何が必要なのかについて詳しく分析していく。

2. 研究方法

データには、ACTFL-OPI の書き起こしデータを使用した。KY コーパス⁽¹⁾の他に新たに行った非母語話者(2名)および日本人(13名)対象に行った OPI も含めた。

インタビューでは、いくつかの話題について一連の質問をして被験者の応答を録音する。意見述べの談話を抽出する際、インタビュアーが質問を投げかけ、その質問に対する被験者の答えを一例とした。例えば、ワールドカップ共同開催についてどう思うか聞き、それに対する答えで一例、スタッフのトップとしてどういうふうによく対処するかという質

問に対する答えで一例というように数えた。

調査 1 では、抽象的に述べるとはどのようなことかを考察し、具象から抽象へのレベルの設定を試みた。その上で、調査 2 として、日本人の意見述べの実態について調べ、抽象的に意見を述べている部分で使われている語彙・表現や使われ方、頻度について調査した。ここでは、日本語母語話者 13 名のインタビュー内容から抽出した意見述べ談話 48 例を対象とした。

さらに、同じ設定レベルに従い、日本語非母語話者の意見述べの分析を行った。超級話者による意見述べ談話 40 例と上級一上の話者による意見述べ談話 49 例を対象とした。超級の例は中国人 6 名、韓国人 5 名計 11 名の OPI データによるもので、上級一上の例は中国人 6 名、韓国人 4 名計 10 名の OPI データによるものである。

3. 分析内容

被験者の発話を国立国語研究所(1994)に従い、話題開始の受け入れ・事情の説明・事実の指摘・見解の表明などの単位方略に分け、意見述べの中心的部分である「見解の表明」が出現している一連の発話を抽出した。被験者側に投げかけられた話題に対して被験者がさしたる関心がない、あるいは特に意見・考えがないなどの場合、単なる事実の指摘や事情の説明に終始しているものがあり、それらは意見述べの研究対象としてふさわしくないと考えたからである。

分析は、調査 1 で抽象的に述べている部分をその抽象性の度合いにより 3 つのレベルを設定した。その上で、調査 2 において、1. どのような表現を使って抽象的に述べているか、2. 抽象的に述べている箇所が談話の中のどのような部分に現れているか、そして、3. 母語話者、超級話者、上級一上の話者の意見述べで抽象的に述べている部分の出現割合について調べた。

最後にそれらの結果を踏まえて、効果的に意見を述べられるようになるための教育の指針を示す。

3-1 抽象的に述べているかの判断

本研究では、抽象性について次のように考えた。抽象とは、下中編(1985)や日本認知科学会(2002)によると、事物を構成する諸属性のうち、ある特定の視点にとって本質的であると認知された一部分の属性だけを他から分離し、引き出して思考の対象とする心的過程のことを言う。そのため、本質的なもの・焦点化したもの以外の諸側面・諸性質を切り捨て捨象することになる。

意見述べの際にも、その内容として自分の考えの中核となる部分について、本質的に概念を述べるのが重要であると考えられる。

小川・稲村(1974)では名詞の具体性・抽象性と記憶の容易性との関係を調べている。その際、様々な語彙を用意し、それについてイメージを思い浮かべやすいかという心像性、非常に抽象的か具体的かという具象性を、自由連想法により測定している。また、有意味度については 7 段階評価で、ある一語を見てその語を契機として思い浮かんだことばをできるだけたくさん書かせている。この 3 つの基準のうち、有意味度は記憶・学習の容易性

との関連で取り上げられており、本研究には該当しないので、調査には含めなかった。

心像性について、小川・稲村(1974)は、物や事象が心に浮かぶイメージの強さと定義している。「もの」や「事象」が心に浮かぶイメージの強さは名詞により異なっている。例えば「馬車」と「流動」という名詞について考えてみると、「馬車」は非常にイメージを浮かべやすいのに対して、「流動」はイメージを浮かべにくく心像性は低くなる。

次に具象性については、ある名詞がどの程度具体的なものや人と結びついているかにより判定している。例えば、「教科書」は見たりさわったりと感覚的に経験でき、非常に具体的なものと容易に納得できるであろう。それに対して「発揮」は感覚的経験はできないため、具象性は低くなる。

小川・稲村(1974)には漢字二文字の名詞 400 語の調査結果が挙げられており、心像性も具象性も高いものとしては、例えば「切手」のような名詞が、心像性が高く具象性が低いものには「幽霊」のような名詞が、また、心像性が低く具象性が高いものには「今年」・「燐酸」のような名詞が、心像性が低く具象性も低いものには「乱用」・「永続」・「事情」などの名詞が挙げられている。

そして、この心像性が低く、具象性も低いという目安、および、その名詞群を本研究において表現面での抽象性を判断する際に援用した。

3-2 具象から抽象への表現レベル

心像性が低く具象性も低い語彙や表現を使用して述べているかどうかにより抽象性の判断をする際に、抽象的に述べる表現のレベルは一樣ではなく、述べられている内容が本質的かどうか、焦点化されているかどうかという点も含めて、意見を述べる際に具象から抽象へといくつかのレベルがあることが認められた。小川・稲村(1974)、高野(1984)においても、こうした段階があることについての指摘があり、一樣に分析することは適切ではないと考え、表 1 のような 3 つのレベルを設定した。

表 1 具象から抽象への 3 つのレベル

抽象性のレベル	意見述べ 例 1	意見述べ 例 2
個別例示レベル	ハンバーガーばかり食べるのはよくない。	よくジムで運動するのでいつも元気だ。
概説レベル	肉が多い食事は体によくない。	スポーツは体のためによい。
概念レベル	肉中心の食生活は健康に悪影響を与える。	スポーツの習慣により心身の健康を維持することができる。

意見述べ例 1 を使って説明すると、個別例示レベルは、ハンバーガーという個別的なものを取り上げて、それをよくないという簡単な言い方で表しており、もっとも具体的なレベルである。概説レベルでは、「肉が多い食事」と、一般化しているが、「体によくない」が漠然とした言い方で、抽象性も多少含まれてはいるが、まだ、本質的というほど抽象性のレベルは高くない。それに対し、概念レベルでは、「肉中心の食生活」「健康に悪影響」

と、食生活に焦点を絞り、それが、健康という側面で悪い影響を与えると、的確な考えが伝わってくる。

つまり、個別例示レベルというのは、ある特定の事物や経験、それ自体について、平易な表現で述べるレベルで、具体的なのでわかりやすい発話だが、図1のように、あくまでもAの一例、または、BとCなど数例についてであり、普遍的な考えとしては受け入れられないものである。

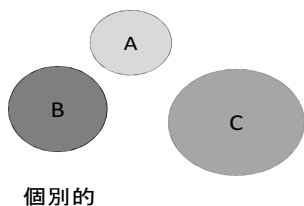


図1. 個別例示レベル

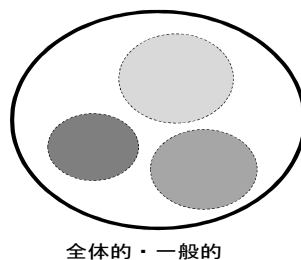


図2. 概説レベル

たとえば、次の例3のように、彼一人についての話で終わっているようなものである。

例3：うーん、事件のねー、ほんとの現場を見てるわけじゃないのでなんともいえないけど、やっぱり彼はあのクロだったと思うんですよね。(母語話者女性)

図2に示す概説レベルは、図1のA、B、Cという個別的なものではなく、それらを含んだ全体について、または、一般的なことについて、述べているものである。個別的な内容や事物について、どれとは特定することなく一般化して、全体について大まかに述べたり、その大体を説明したりしている。普遍的だが、漠然としたところを残した述べ方で、意見としては説得力に欠け、十分に納得されないことがある。

例4のように、「前に比べればいい」というかなり大まかな述べ方で、いいことはわかるが、「どのようにいいのか」という焦点が定まらず、公式見解の開陳という印象で、意見としての説得力が弱い。

例4：で、もちろんそれはいいとは言いませんけども、まー、それは川一つとっても、海一つとっても、ちょっと前に比べればよく、いいほう？に進んでいるとは思いますがね。(母語話者男性)

それに対して、図3に示す概念レベルでは、ある事物の性質についての考えや認識についての的確に本質的に述べている。自分の意見のある側面を取り出して、それ以外の側面は捨象することにより、ある事物に対する本質的な内容にスポットライトを当て、そこに焦点を置いて述べている。それにより、意見として明確になり、説得力を増している。つまり、意見として、その概念の範疇は狭まり、よりの確な考えが理解されるのである。

例5のように、人々の価値観の変化について、倫理観という側面に焦点を置いていて、

その点に変化しているのだと的確に理解することができる。



図 3. 概念レベル

例 5：ちょっと手口が凶悪になった程度じゃあないと思うんですねー、何か、大きな、こう倫理基準が崩れてる、んじゃーないかと思えますけどね。(母語話者男性)

意見述べの場合、このように的確に自分の考えを述べることが要求されており、概念レベルでの意見表明が必要になってくると考えられる。

4. 分析結果

調査 2 では、母語話者、および非母語話者の各発話例を国立国語研究所(1994)により各単位方略に分類した上で、前述の個別例示レベル・概説レベル・概念レベルの三つのレベルに分け、最も抽象度の高い概念レベル部分について詳しく分析した。

4-1 概念レベルに使用される表現

まず、どのような表現が使われて概念レベルの話し方になっているのかについて分析した結果、当然予想される漢語(佐藤 1979)が最も多く使用されており、また、「瀬戸際に立つ」「油を売る」などの慣用句も見られた。

その他に、メタファー・外来語・擬態語なども使われていた。メタファーは、異なる領域間の類似性に着目して、ある領域の構造を別の領域に写像して理解しやすくする働きを持っており(Lakoff & Johnson 1980)、抽象的なものをより身近で経験のあるものに写像したものである。例 6 の「話す土壌」「状況を引き戻す」のように、わかりやすい表現だが、内容的には抽象性が高い表現になっていた。

漢語の使用については、荻原他(2001)においてレベルとの相関関係が指摘されており、また、メタファーの使用については、岡(2004)がレベルが上がるにつれ、インタビュー会話中のメタファーの出現回数が増えるとしており、この結果と同様の知見が報告されている。

例 6：しかしそれをみんなで、こう、話す(うん)^②土壌というのがやはりあるからこそ(うん)、悪いことをした時に、逆の、ところからそれを引き戻したりとか(うん)。(母語話者男性)

また、漢語が使われる代わりとして、外来語が使われていた。これらは、漢語が意味する抽象概念と同様の概念を外来語で示しているので、分析対象として取り上げることにした。例えば、例7のように、「フェアじゃない」「モラルで縛られている」などが、「公平」「道徳観」などの漢語に当たる言葉として使用されていることがわかった。

例7：ただもしそれで記録がはるかに違うんだと、ちょっとフェアじゃないな、使えない人と、ね。モラルで縛られてて絶対使わない人と、あの無視して使う人が、差が出たらよくないと思いますよね。(母語話者女性)

さらに、擬態語についても、すべての擬態語があてはまるわけではないが、例8のように「我慢合戦をして、直接の対話をしないと、このままの状況がずるずるといってしまう」というように、硬直した状況が長引いていくという抽象的な様子が語られ、擬態語によって、どのような状況かが焦点化されて表現されていた。その他にも、「せかせかした生き方」、「ぎりぎりの選択」など、生き方や選択のし方について、その状況、様子などの抽象的な部分が焦点化されて表現されており、擬態語は、主に、抽象的なこと、ものの様子を示す場合に使われていた。

例8：で、まー、お互い我慢合戦?(はい)で、もうそろそろ、ここらあたりで、まー、直接の対話?をしないと、もうこのままずるずるといってしまうような気がしますね。(母語話者男性)

4-2 概念レベルの使われ方

次に、抽象的に述べている部分がどのような使われ方をしているかについての分析を行った。その結果、概念レベルの使われ方は、主に三つに分類できる。

まず、一つ目は、意見の理由や根拠となる例を述べた後に、それらを別の言い方に置き換えて概念的にまとめる場合(例・理由のまとめ)に使われていた。

例えば、例9のように、日本人の価値観の変化について問われ、以前の状況について考えを述べている部分で、「一生懸命逆に働けば幸せになれる」と以前からあった価値観の例を挙げた上で、それらが日本では宗教のような役割を果たしていたという言葉でまとめて、以前の価値観についての意見を抽象的な表現を使って言いかえていた。

例9：日本はないんですけどーただ、なんとなく、日本のこう、ま、人に迷惑をかけちゃいけないとか(うん)、こう、ま一生懸命働かなきゃいけないとか何かさういう、ま一生懸命逆に働けば幸せになれるとか、前だとさういうのが暗黙のこー日本における宗教みたいな(あーあ)役割をしてたと思うんですけど、(母語話者男性)

二つ目の使われ方は、視点・態度の表明として使われるもの(視点・態度の表明)で、意見を述べる上で、自分がどのような視点や立場から考えたり、述べたりするかを示してい

る部分で使われていた。

例えば、オリンピックのドーピング問題について、次のようにオリンピックに対する考えの自分の視点を抽象的な表現で明らかにしている。

例 10：あの一、だから、そうすると、あのオリンピックっていうのは、人間がここまでその一、えー、能力を物理的な能力を発揮できるかっていうのがまーオリンピックだと思っんですけど、まーあの一、みんなが集ってやるっていうところに意義があるって言う人もいるかもしれませんがけれども、(母語話者男性)

また、次の例 11 では香港返還に関して、中国人としての自分、日本に住んでいる自分など、自分のアイデンティティが一つではないという立場を、「何重人格もある」「いろいろな人格を持っている」と抽象性の高い表現で述べている。

例 11：あの一、私はもう、今、だから中国人ですけれども、実際全然中国に住んでないし、仕事も中国語を教えているだけで、付き合っている相手も日本人が多いんで、だから香港に対しては、やっぱり何重人格もあるということ、自分自身でね、いろいろな人格を持っているような気がするんですね。(中国語超級話者女性)

三つ目は、最も多く見られたもので、自分の考えを端的にまとめている部分(意見のまとめ)で使われていた。

例えば、これは、セクハラを防ぐ対策について意見を述べている部分の一部で、下線部分のように社会的な話題に適した抽象的な表現を多用して、権利の主張は恩恵を享受している点から妥当ではないと、自分の意見を述べている。

例 12:でも私は一人の女性として差別されている分得している部分もあるっていうか、両方享受しているんですやっぱり。だからその得する部分を捨てない限りは、そういうところで、権利とかを主張していくのは、妥当な策ではないと思うので一。恩恵を受けてんだったら、うーん、多少はしょうがないなって。(母語話者女性)

以上のように、意見述べでは、主に三つの使われ方によって、概念レベルが出現していることがわかった。

4-3 概念レベルの出現頻度

前述したような表現、使われ方をした概念レベルがどの程度出現したかという頻度を調べた。その結果、日本人の場合は、48 例中 42 例(87.5%)の意見述べてに概念レベルが出現していた(図 4)。

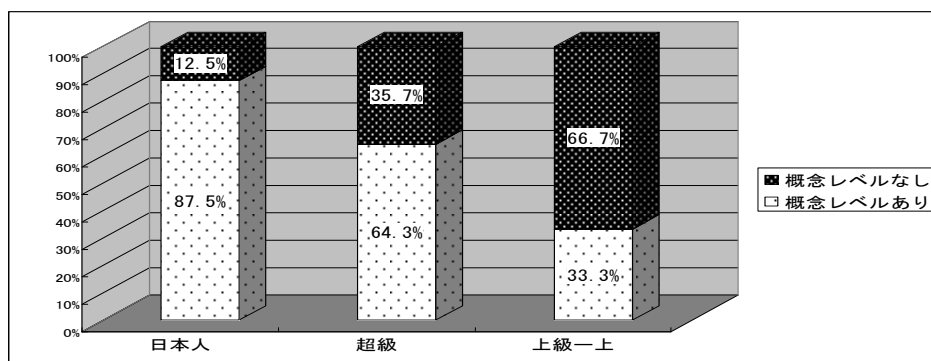


図4. レベル別概念レベル出現数

それに対して、外国人話者の場合は、超級の話者の場合は、42 例中 27 例(64.3%)、上級一上の話者の場合は 51 例中 17 例(33.3%)の概念レベルの出現があり、上級一上では、概念レベルのない意見述べのほうが多いことが明らかになった。つまり、超級と上級一上の間では、抽象度の高さにかなり差があることが分かる。

さらに、意見述べでみられた概念レベルが、どのように使われているかについて、①例・理由のまとめ、②視点・態度の表明、③意見のまとめの使われ方別に、出現割合を求めた(図5)。

その結果、最も多かったのは③意見のまとめとして使われていたもので、日本人と超級話者では約 7 割に見られた。上級一上では、約 8 割が意見のまとめとして使われていた。

次に多かったのが、①例・理由のまとめとして使われていたもので、日本人が 22.2%、超級話者が 18.4%、上級一上の話者が 19.0%で、それほど大きな差はなかった。

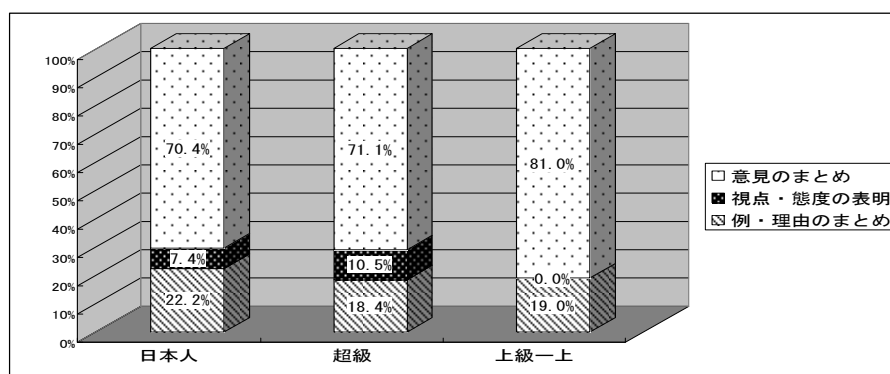


図5 使われ方別概念レベル出現数

②視点・態度の表明として使われていた概念レベルは、日本人話者と超級話者にしか見られず、10%程度みられただけであった。意見を述べる際に、自分の立場や視点を明らかにしてから意見を述べるには、かなり明確な意見をはじめから持っていなければならないことであり、それを抽象性の高い表現で表すことが、かなり高度な言語活動であると言えるのではないだろうか。

以上のように、具体から抽象へのレベルを3段階に設定し、最も抽象度の高い概念レベルについて、使われている表現、使われ方、出現頻度について分析した。

これらの結果を踏まえ、次に、意見述べにおける教育的な指針を提案したい。指導方法については、上級レベルの学習者を対象とし、ACTFL-OPI 基準に則って社会的な話題に対する意見述べを扱っている荻原他(2007)を参考にする。

5. 抽象的に意見を述べるための指針

概念レベルが使われていた3つの部分について、指導面から提案をする。まず、最も多かった③意見のまとめの部分で、意見の焦点を明確にし、より抽象的な表現に言いかえることで抽象度を上げ、意見を的確なものにする必要がある。

例えば、次のような意見表明をする場合、意見の焦点は「働く意義」にあることから、それを主語にして、「いろいろ競争する」「能力が上がる」という表現をより抽象度の高い表現に言いかえていく指導が効果的だと考える。

例 13: 日本の大企業で働けば、社内でもいろいろ競争することになるので、自分の能力も上がっていいと思います。



改善例: 日本の大企業で働く意義には、組織の中で切磋琢磨する中で自分の能力を極めることができるということもあと思っています。

次に、①例・理由のまとめに抽象度の高い表現を使うという指導が考えられる。例えば、次の例のような場合、働き方の個別例だけを挙げるのではなく、それを改善例のように異なる表現でまとめることで、「雇用形態」のような自分の注目しているポイントが明確になり例の内容が的確に理解されるようになる。

例 14: 会社での働き方は、正社員だけでなく、契約社員や派遣、パート、アルバイトなどいろいろです。



改善例: 会社での働き方は、正社員だけでなく、契約社員や派遣、パート、アルバイトなどいろいろです。つまり、会社の雇用形態は多様化しています。

さらに、理由や例をあげる場合、それらの理由や例を取り上げた意図が分かるように意味づけを行うようにするとよい。

例えば、次の例 15 のような場合、下線部が意見の理由となっていることから、その理由がどのような意図で取り上げられているかわかるように抽象度の高い言葉で説明してから、意見表明をするようにすると、理由としての具体例の意味づけが行われ、より根拠が明確になり、説得力のある意見述べとなると考える。

例 15: インフレなんです。それに、原油価格も5%上がっています。それで、低所得者

層の人々の生活はますます苦しいものになっています。



改善例：インフレに加えて、原油価格も 5% 上がっており、物価上昇に拍車をかけているのです。それで、低所得者層の人々の生活はますます苦しいものになっています。

6. 今後の課題

最後に、今後の課題としては、まず、概念レベルの使用において多くみられた③意見のまとめ、①例・理由のまとめのそれぞれの中でよく使用される語彙・表現を示すことが挙げられる。これらが明らかになれば、意見述べの教育を行う際に活用でき、より効果的な指導が行えるのではないだろうか。

また、日本人、超絶話者ともに、②視点・態度の表明としての使用については、1 割程度しか見られなかった。だが、意見と理由だけを述べるのではなく、意見を述べるにあたっての自分の立場やその話題を考える上での自分の視点などを示すことによって意見を抽象的に述べることができれば、より明確な意見述べとなり、説得力のあるものになる。課題の 2 点目として、その場合、どのような表現や語彙が使われるのかについて、もう少し多くの例を集めて分析する必要がある。

本研究で「準概念レベル」と名付けたもので、概念レベルの兆しは見えていても、語彙選択が適切でなかったり、言い回しが不自然であったりして内容が伝わらず、概念レベルに到達できないレベルの存在が上級－上話者に多く確認できた。課題の 3 点目として、こうした「準概念レベル」が概念レベルに到達できない理由を詳しく調査する必要性が挙げられる。そうすることによって、上級－上レベルの話者を、超絶に近づけることができるのではないかと考えられる。

今後はこのような点についても、研究を進め、社会的・専門的な話題を抽象的に話せるような話者養成に貢献していきたい。

注

- (1) 中国語・韓国語・英語母語話者を対象に行われた ACTFL-OPI の文字化資料が、各レベル別に紹介されているコーパス。今回は、超絶と上級－上と認定された中国語母語話者と韓国語母語話者の文字化資料を利用した。
- (2) 会話例内の () は、相手の相づちを示す。

参考文献

- 岡まゆみ(2004)「メタファーは OPI レベル判定のマーカ―となりうるか?」*The 3rd International Symposium on OPI, The 12th Princeton Japanese Pedagogy Forum Proceedings, Princeton University*
- 小川嗣夫・稲村義貞(1974)「言語材料の諸属性の検討」『心理学研究』44(6), 317-327, 日本心理学会
- 荻原稚佳子・齊藤真理子・伊藤とく美(2007)『日本語超絶話者へのかけはしーきちんと伝える技術と表現』スリーエーネットワーク

- 荻原稚佳子・齊藤真理子・増田眞佐子・米田由喜代・伊藤とく美(2001)「上級・超級日本語学習者における発話分析—内容領域との関わりから—」『世界の日本語教育』11号, 83-102, 国際交流基金日本語センター
- 国立国語研究所編(1994)『伝え合うことば4 機能一覧表』
- 佐藤喜代治(1979)『日本の漢語』角川書店
- 下中邦彦編(1985)『新版 心理学事典』平凡社
- 高野隆一(1984)「概念間の関係づけにおける抽象と具体の問題について」『早稲田大学大学院文学研究科紀要 別冊哲学・史学編』10, 11-21, 早稲田大学大学院文学研究科
- 牧野成一監修・日本語 OPI 研究会翻訳プロジェクトチーム翻訳(1999)『ACTFL-OPI 試験官養成用マニュアル(1999年改訂版)』アルク
- 日本認知科学会(2002)『認知科学辞典』共立出版株式会社
- Lakoff, G. & Johnson, M.(1980) *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press
- 渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸(訳) (1986)『レトリックと人生』大修館書店